

不登校を経験したフリースクールの小学生との交流 プログラムの試み : 大学生の心境の変化に着目し て

著者	菅野 恵
雑誌名	和光大学現代人間学部紀要
巻	12
ページ	177-184
発行年	2019-03-08
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00004645/

〈実践報告〉

不登校を経験したフリースクールの 小学生との交流プログラムの試み

——大学生の心境の変化に着目して

菅野 恵 *KANNO Kei*

- 1 — 問題と目的
- 2 — 方法
- 3 — 結果
- 4 — 考察

【Abstract】 In schools across Japan, the issue of students refusing to go to school is increasingly becoming more complex and varied. Recent trends have shown that the percentage of elementary and middle school students who refuse to go to school is at an all-time high. Thus, attention has been focused on free schools as a place that supports children who refuse to go to school. Free schools welcome students who have become unable to go to school. On the other hand, due to the higher awareness of the issue of children who refuse to go to school, there are many university students who wish to learn about this issue in university classes. However, in universities, the focus is on learning and acquiring knowledge about the issue itself; opportunities are rare for university students to interact with children who have experienced this issue.

This paper reports the implementation and progress of a program through which university students who had an interest in the issue could interact with elementary school students who attend a free school. Through the program, both the university students and free school students developed deeper relationships through such activities as games and exploring the university campus. Moreover, a survey was distributed to the university students, and a qualitative analysis was conducted on changes in the state of mind of the university students before and after the program. As a result, it was suggested that before the program, the university students held anxieties about interacting with the children and had biased views of the issue of children refusing to go to school. After the program, the university students saw changes in their impressions of this issue and felt that their perspectives were widened. Furthermore, this paper discusses the significance of university students learning about the issue of children refusing to go to school through practical experience.

1 — 問題と目的

日本における不登校の児童生徒数は、少子化にもかかわらず小学生と中学生を合わせて過去最多となっている。これまで「学校恐怖症 (school phobia)」や「登校拒否 (school refusal)」という用語の変遷を経て、現在では登校したくてもできない子どもも含まれる用

語として「不登校 (school absenteeism)」という名称が定着している。1998 年以降、文部科学省では不登校を「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくてもできない状況にあること (ただし、病気や経済的理由によるものを除く)」と定義している。

不登校に関連する近年の主な傾向や動向として、①不登校数・割合の増加、②不登校要因の多様化、③不登校の子どもへの支援の広がり、の 3 点が挙げられる。文部科学省の統計調査 (2017) によると、不登校児童生徒の割合は 1.47%であり、68 人に 1 人が不登校となっている。学校種別にみると、小学校では 0.54%に対して中学校は 3.25%と高い割合を示し、学年が上がるにつれて不登校の割合が高まる傾向にあり、特に小学 6 年生から中学 1 年生にかけて 2.6 倍増加している。このことから、小学校から中学校への環境移行期に不適應に陥りやすいことや、小学生でも不登校傾向の子どもが潜在的に多く存在している可能性が推測される。次に、不登校の要因の多様化である。最新データによると小学校・中学校を合わせた不登校の要因は、「学校に係わる状況 (64.4%)」と「家庭に係わる状況 (36.5%)」の 2 区分に大別され、家庭の要因も少なくないことがわかる。また、本人に係わる要因の 4 分類のうち、「不安の傾向」が 33.2%と最も多く、次いで「無気力の傾向」が 29.9%、「学校における人間関係の課題」が 16.5%、「あそび・非行の傾向」が 3.9%となっている。「学校における人間関係の課題」を抱える子どもの 75.8%に「いじめ」を挙げているが、全体に占める割合は 0.5%に過ぎない。よって、いじめの問題を解決することで登校できるようになるといった一義的な対応ではなく、おそらく統計に現れにくい発達障がい、虐待、貧困、ひとり親家庭などの複合的な問題による早期解決の困難さが影響する。

このような現状に対する不登校の子どもへの支援は、いわゆる学校教育法の第 1 条で定められた学校とは異なる NPO 法人や営利法人が運営するフリースクールに広がりをもつようになった。堀 (1999) によると、フリースクールは子どもの個性の尊重や子ども自身の決定・選択の重視を特徴としている。欧米では 1960 年代の終わりから 1970 年代始めに注目されはじめ、日本でも 1990 年頃から登場しさまざまなタイプのフリースクールが存在するようになった (田中, 2002)。さらに 1992 年以降、フリースクールへの登校は在籍する小・中学校の校長裁量で出席扱いとしてみなされるようになり、現在に至っている。公教育が多くの課題に直面するなかでフリースクールには補完的な役割が期待され (加藤, 2018)、個別の学習支援以外にも、相談・カウンセリング、個別の学習、芸術活動、調理体験、自然体験 (自然観察、農業体験) (文部科学省, 2015) といった学習指導要領に縛られない活動内容となっている。総じて、フリースクールは公的な機関ではないことから独自の取り組みや柔軟な対応が可能であり、不登校に至るまでの心の傷を回復させるための有益な場となっている。

ところで、不登校の問題への関心の高まりによって、大学の授業で不登校について学びたい大学生が多く存在する。しかし、大学では不登校問題の知識を学ぶことが主で座学中心であり、自主的にボランティア活動を行う以外に不登校を経験した子どもと接するよう

な機会はほとんどないため、実践的な学びの場が求められる。一方、フリースクールの子どもたちは、公教育の場よりも人間関係が限定されるため、多様な価値観を持った大学生と接する機会に意味がある。よって、フリースクールの子どもたちと大学生との交流は、相互のメリットが推測される。これまでの先行研究によると、フリースクールの子どもたちとスタッフとの相互行為に関する報告のなかで、フリースクールでは教育や心理の専門性を部分的に取り込みながらポジティブな感情体験を志向するような「素人性」や「人間性」といったあいまいな関わりの必要性を指摘している(井上, 2012)。また、大学生による不登校支援に関する研究や論文はいくつかあるものの(例えば高・古澤, 2012; 鈴木, 2007; 玉木, 2007)、フリースクールの子どもたちと大学生との交流に関する報告はあまりみられない。

本稿では、不登校を経験したフリースクールの小学生と大学生の交流プログラムの試みを報告し、プログラムの実施前後の大学生の心境の変化に着目し、交流プログラムの意義について検討を行う。

2 — 方法

1) 交流プログラムの実施時期、参加者の内訳

交流プログラムは2017年9月と2018年6月の2回にわたり実施した。いずれも1日で10時から15時の5時間程度で行われた。交流プログラムの参加者は、首都圏のフリースクールに通う小学生3~6年生と、首都圏の私立大学で児童心理学のゼミに所属する大学生3~4年生であった。加えて双方の教員が引率を行った。小学生の参加人数は、2017年24名、2018年16名であった。大学生の参加人数は、2017年24名、2018年34名であった。

2) 交流プログラムの実施に至るまでの流れ

交流プログラムは、フリースクールの教員と筆者である大学教員とのつながりがきっかけでゼミ生との相互交流を模索したことから実施することになった。第1回目は大学生側がフリースクールの近隣の体育館に出向き、第2回目はフリースクールの子どもたちを大学に招くことになった。交流プログラムは、大学生自身が企画、運営を行い、適宜ゼミ担当教員からのフォローを得た。

交流プログラムの企画は、大学生がゼミ授業の時間帯を中心に約1か月かけて役割分担を行いながら準備を行った。フリースクールの子どもたち及び保護者に対して、フリースクールの教員から交流プログラムの趣旨を説明してもらい同意を得た。

3) 大学生に対するアンケートの実施と分析

交流後に大学生に対しアンケートを実施した。アンケートの内容は、「子どもたちとの交流前はどのような気持ちでしたか?」「交流した後はどのような気持ちになりましたか?」の2項目について、子どもたちとはじめて交流する前後の心境について自由記述欄に記載を

求めた。また大学入学後に小学生と交流する機会があったか、不登校を経験した子どもと交流する機会があったか、について確認する項目も設けた。自由記述欄の分析は、KJ法（川喜田, 1970）を参考に記載内容をカテゴリーに分類し、カテゴリー名を付けて表にまとめた。

4) 倫理的配慮について

今回の報告にあたり、個人や団体が特定されないための配慮を行うことを伝え、フリースクール側に内容を確認してもらったうえで写真の掲載も含めて同意を得ているが、写真の一部を加工して掲載した。大学生にはアンケート実施の趣旨を説明し、個人が特定されないように掲載することを伝え掲載の同意を得た。なお、アンケートへの回答を拒否しても成績評価に影響しない旨を説明した。

3 — 結果

1) 第1回交流プログラムの経過（2017年）

体育館で行われた第1回目の交流プログラムは、フリースクール側も大学生側もやや緊張な面持ちでスタートした（写真1）。交流プログラムの内容を Table1 に示した。大学生は、司会、ゲーム進行、ルール説明、フリーの4つの役割を分担して進められた。まず、子どもと大学生の人数バランスをみながら5つのチームに分かれた。1つのチームは子どもが4～5名、大学生が4名程度で構成した。はじめにアイスブレイクタイムの枠組みで

Table1 第1回交流プログラムの流れ

時間帯	内容
10:30-10:35	開会式
10:40-10:55	アイスブレイクタイム（自己紹介ゲームなど）
10:55-12:00	ゲーム（ボール運び、人間知恵の輪、手つなぎ鬼）
12:00-13:30	昼食、フリータイム
13:30-14:30	ゲーム（フルーツバスケット、ハンカチ落とし、じゃんけん列車）
14:30-14:40	閉会式



写真1 開会式の様子



写真2 ゲーム（人間知恵の輪）の様子

自己紹介ゲームを行い、チーム名を決めて全体で発表した。その後、チーム対抗戦でボール運びや人間知恵の輪 (写真2) などの複数のゲームを進めていった。途中でトイレや休憩のためにチームから外れる子どもについては、フリーの大学生や引率教員が対応した。昼食では子どもたちの輪に大学生が混ざり、談笑しながら交流する様子がみられた。フリータイムでは、大学生が用意したゲームだけでなく、子どもたちから自発的にゲームが提案され、鬼ごっこなどを楽しんでいた。午後のプログラムでは、引き続きチーム対抗戦でフルーツバスケット、ハンカチ落とし、じゃんけん列車などのゲームを行った。最後の閉会式では、大学生が用意したお菓子のプレゼントを一人ひとりに渡して終えた。

2) 第2回交流プログラムの経過 (2018年)

フリースクールの子どもたちを大学に招いた第2回目の交流プログラム (Table2) は、開会式を経てアイスブレイクタイムの後、子ども3~5人と大学生2~3人からなるグループ4~6組で行動し、グループメンバーの大学生がリーダーになって子どもたちを導いた。開会式とアイスブレイクタイムでは、大学内の教室で行い、顔合わせを行った。3年生は初顔合わせということもあり、やや緊張した面持ちであった。アイスブレイクタイムの後はグループごとに移動した。大学探検 (写真3) では、子どもたちには探検マップが手渡され、マップに記載された4~5か所のポイントを回り、ポイント付近にいる担当の大学生からお菓子を受け取るように伝えた。図書館では、図書館の職員の協力も得て、館内でのスタンプラリーを楽しんだ。昼は学生食堂にてグループ単位で食事を摂ることになってい

Table2 第2回交流プログラムの流れ

時間帯	内容
11:30-11:35	開会式
11:35-11:50	アイスブレイクタイム
11:50-13:00	大学探検 (グラウンド、図書館、研究室、教室など)
13:00-14:00	学生食堂で昼食
14:00-14:20	大学探検報告会
14:20-14:30	閉会式



写真3 大学探検の様子



写真4 大学探検報告会の様子

たため、学生食堂をゴールとし、ゴール担当の大学生が子どもたちを出迎えた。なお、昼食を13時からとしたのは、学生食堂の混雑時間帯を避けるためであった。昼食では子どもたちが学生食堂のメニューを珍しそうに眺め、メニュー選びから会計するまでグループの大学生がサポートを行った。食後もデザートを再度購入し学生食堂を楽しむ子どもの様子が見られた。最後に開会式を行った教室に戻り、大学探検報告会(写真4)を行い、グループごとに体験を共有して閉会式で別れを惜しんだ。

3) 大学生に対するアンケートの結果

第2回目の交流プログラム終了後、大学生25名からアンケート用紙を回収した。

初めてフリースクールの子どものたちと交流する前の心境としては、「不安」「偏ったイメージ」「入り混じった感情」「その他」の4つのカテゴリーが抽出された(Table3)。「不安」の例としては、「言っではいけない単語や尋ねてはいけない話題があるかもしれないのでは」「あまり心を開いてくれないのではないかと不安だった」「緊急時にどうすればよいのだろう」などが挙げら

Table3 交流プログラム前の大学生の心境(記述例)

不安(17)	言っではいけない単語や尋ねてはいけない話題があるかもしれないのではと不安だった。 あまり心を開いてくれないのではないかと不安だった。 緊急時にどうすればよいのだろうと不安だった。 子どもたちを楽しませることができるか不安だった。 小学生との話題作りが得意ではないため不安だった。
偏ったイメージ(8)	主張的ではなく自分から介入しない子が多いイメージであった。 人間不信に陥っているのではという印象を持っていた。 主張的ではなく自分から介入しない子が多いイメージだった。 人見知りで人と関わることに消極的な印象だった。
入り混じった感情(5)	一緒に遊んでくれるか、何を話したらよいか、不安な気持ちと楽しみな気持ちでいっぱいだった。 自分たちが企画したプログラムを喜んでくれるか期待と不安があった。 不安な反面、どんな子どもたちが来るのか楽しみといった気持ちも入り混じっていた。
その他(8)	子どもたちが不安にならないように頑張りたいと思った。 最近の子どものたちの流行が何かわからずどのようなことで喜ぶのか考えるのが難しかった。

※()内はカテゴリー数。

Table4 交流プログラム後の大学生の心境(記述例)

イメージの変容(10)	はしゃいで感情豊かにしゃべりかけてきて本当に不登校だったのかと思うほどであった。 子どもたちがフリースクールの様子を話してくれてフリースクールのイメージが変わった。 多少相手との距離感が苦手な子どももいたがこれまでのイメージの偏りを恥ずかしく思った。 通常登校している子どもたちと大きな差はないと感じ、明るいイメージに変化した。 衝動的な行動をとる子どももいたが、純真な考えをもって行動していることがわかった。
対応の手ごたえ(9)	子どもたちが楽しんでくれたことが嬉しくやりがいを感じた。 交流を楽しんでもらえたという満足感を抱いた。 はじめは目を合わせてくれなかったが、めげずに話しかけると子どものほうから話しかけてくれた。 こちらから話しかけると子どもたちで話を広げてくれてうまく打ち解けることができた。 正面から向き合えばしっかり応えてくれることを実感した。
子どもに対する洞察(9)	学生側を気遣う子どもがいろいろな経験をしたからこそ相手を気遣うことができると感じた。 慣れない環境に適応する子どもたち自身の強さを感じた。 特別扱いする必要はなく、普通に接して大丈夫ということに気づいた。
その他(12)	良い子だらけで自分たちも楽しめ、やりきったという充実感と子どもたちとの別れが名残惜しかった。 子どもたちはみんな楽しそうに笑ってくれて子どもの純粋さを実感した。

※()内はカテゴリー数。

れた。「偏ったイメージ」として、「主張的ではなく自分から介入しない子が多いイメージであった」「人間不信に陥っているのではという印象を持っていた」「主張的ではなく自分から介入しない子が多いイメージだった。」などであった。「入り混じった感情」として、「一緒に遊んでくれるか、何を話したらよいか、不安な気持ちと楽しみな気持ちでいっぱいだった」「自分たちが企画したプログラムを喜んでくれるか期待と不安があった」などが挙げられた。

交流プログラム後の心境として「イメージの変容」「対応の手ごたえ」「子どもに対する洞察」「その他」の категорияに分類された (Table4)。「イメージの変容」の例として、「はしゃいで感情豊かにしゃべりかけてきて本当に不登校だったのかと思うほどであった」「子どもたちがフリースクールの様子を話してくれてフリースクールのイメージが変わった」「多少相手との距離間が苦手な子どももいたがこれまでのイメージの偏りを恥ずかしく思った」などであった。「対応の手ごたえ」としては、「子どもたちが楽しんでくれたことが嬉しくやりがいを感じた」「交流を楽しんでもらえたという満足感を抱いた」「はじめは目を合わせてくれなかったが、めげずに話しかけると子どものほうから話しかけてくれた」などの内容であった。「子どもに対する洞察」として、「学生側を気遣う子どもがいていろんな経験をしたからこそ相手を気遣うことができると感じた」「慣れない環境に適応する子どもたち自身の強さを感じた」といった声もあった。

4——考察

フリースクールの子どもたちとの交流は、大学生にとって大学の座学の授業では得られない経験となり実践的な学びの場になった。フリースクールの子どもたちも楽しんでいる様子が見られ、次回の交流を期待する声も聴かれた。大学生を対象としたアンケートからは、交流プログラムの企画の段階で不安を抱いており、偏ったイメージ、入り混じった感情などが明らかになった。特に子どもたちと接すること自体に不安を抱えるような大学生も見受けられ、このような大学生の思考が、子どもと接するボランティア活動への消極的な姿勢になっている可能性もある。また、「不登校経験のある子ども」というだけで不登校やフリースクールの子どもに対する偏ったイメージを持つ大学生が多くみられた。しかし、交流プログラムを通してイメージの変容がもたらされポジティブにとらえられるようになったことは、大学生自身の大きな心理的变化であり心理的成長である。子どもへの対応の手ごたえや子どもに対する洞察も得られ、不登校経験を乗り越えてフリースクールで心の回復を図ってきた子どもたちの力強さを実感している大学生もいた。おそらく、子ども自身の力もあると思われるが、独自で柔軟なフリースクールにて、心の支援を受けながら回復してきたことが考えられ、フリースクール側の地道な努力が子どもたちの生き生きした姿として表出されているのではないだろうか。

フリースクールの子どもたちとの交流は、その後も別の形で展開しているため新たな場

で報告する予定であるが、2回の交流を行った限り、フリースクールの子どもたちと大学生の双方にとって意義のある取り組みになったことがいえるであろう。今後の展望として、今回は大学生の心境の変化に着目したが、フリースクールの子どもたちの心境の変化について明らかにすることや、交流プログラムの内容がどのような効果をもたらしているのかといった詳細な分析を行うことなどが挙げられる。

《文献》

- 堀 真一郎 (1999). フリー・スクール 恩田 彰・伊藤 隆二 (編) 臨床心理学辞典 (p.454) 八千代出版
- 井上 烈 (2012). フリースクールにおける相互行為にみるスタッフの感情管理戦略 フォーラム現代社会学, 11, 15-28.
- 加藤 美帆 (2018). フリースクールと公教育の葛藤とゆらぎ——教育機会確保法にみる再配分と承認—— 教育学研究 85, 175-185.
- 川喜田 二郎 (1970). 続・発想法——KJ法の展開と応用—— 中央公論社
- 高賢一・古澤 賢祐 (2012). 不登校の子どもへの関わり方に関する考察——大学生・大学院生を中心として—— 金沢星稜大学人間科学研究, 5 (2), 29-32.
- 文部科学省 (2015). 小・中学校に通っていない義務教育段階の子供が通う民間の団体・施設に関する調査 Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tyousa/_icsFiles/afieldfile/2015/08/05/1360614_02.pdf (2018年11月9日)
- 文部科学省 (2017). 平成29年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/1410392.htm (2018年11月9日)
- 田中 圭治郎 (2002). フリースクールの課題と学校の役割 佛教大学教育学部論集, 13, 85-100.
- 鈴木 希望 (2007). 不登校支援における大学生スタッフの役割について 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻教育論叢, 50, 55-64.
- 玉木 健弘 (2007). 大学生による不登校支援についての検討 福山大学こころの健康相談室紀要, 1, 43-49.

謝辞：アンケートに協力してくれた大学生、交流プログラムに参加してくれた子どもたち、交流プログラムの趣旨に賛同しご尽力いただいたフリースクールの関係者の皆さま、大学関係者の皆さまに心より御礼申し上げます。